

主題研究

心に響く道徳の時間の指導に関する研究

- 生徒の価値意識や生活の実態に応じた 指導過程と指導法の工夫をとおして - (第1報)

教科領域教育室 堀 村 克 利

研究協力校
大迫町立大迫中学校

研究の概要

この研究は中学校の道徳の時間において、生徒の価値意識や生活の実態に応じた指導過程と指導法を工夫することにより、生徒の心に響く道徳の時間の指導について明らかにし、道徳の時間の指導の充実に役立てようとするものである。

2年次研究の第1年次である本年度は、資料の提示や生徒の交流のさせ方の工夫を行うことにより、話合いが生徒の心に響き、生徒自らが考えたい道徳の時間を展開するための基本的な考え方について検討した。

その結果、本年度は、心に響く道徳の時間の指導についての基本構想を立案し、心に響く道徳の時間の手だての試案を作成することができた。

キーワード：心に響く 道徳の時間 価値意識 生活の実態 豊かな表現活動
指導過程 指導法

研究目的

道徳の時間は、学校生活全体で行われる道徳教育と密接な関連を図りながら、計画的、発展的な指導によってこれを補充、深化、統合し、道徳的価値の自覚を深め、道徳的実践力を育成することを目標としている。

ところが、道徳の時間の話合いで、生徒が資料の登場人物に共感したり、自分を重ね合わせて考えたりすることができず、生徒の道徳の時間への学習意欲が高まっていない。これは、生徒に内面から道徳的価値を考えさせるための手だてが十分ではなかったことによるものと思われる。

このような状況を改善するためには、生徒の価値意識や生活の実態に応じた資料の提示や発問の構成、生徒の反応の取り上げ方や交流のさせ方等を工夫することによって、話合いが生徒の心に響き、生徒自らが考えたい道徳の時間を展開していくことが必要である。

そこで、この研究は、中学校の道徳の時間において、生徒の価値意識や生活の実態に応じた指導過程と指導法を工夫することにより、生徒の心に響く道徳の時間の指導について明らかにし、道徳の時間の指導の充実に役立てようとするものである。

研究仮説

中学校の道徳の時間の指導において、生徒の価値意識や生活の実態を把握し、それに応じた豊かな表現活動を位置付けた指導過程を作成し、その指導過程に基づき資料の選択や提示の仕方を工夫した指導を行えば、生徒の心に響き、生徒自らが考えたい道徳の時間が展開でき、道徳の時間の指導の充実に資することができるであろう。

本年度の研究の内容

1 研究の目標

中学校における心に響く道徳の時間の指導に関する基本的な考え方を検討し、基本構想を立案するとともに心に響く道徳の時間の指導に関する手だての試案の作成を行う。

2 研究の内容

(1) 心に響く道徳の時間の指導に関する基本的な考え方の検討

道徳教育についての文献を基に、心に響く道徳の時間の指導の意義を明確にした上で、心に響く道徳の時間の指導に関する基本的な考え方を検討する。

(2) 心に響く道徳の時間の指導に関する基本構想の立案

心に響く道徳の時間の指導に関する基本的な考え方を基に、心に響く道徳の時間の指導に関する基本構想を立案する。

(3) 心に響く道徳の時間の指導に関する手だての試案の作成

心に響く道徳の時間の指導に関する基本構想を基に、心に響く道徳の時間の指導に関する手だての試案を作成する。

心に響く道徳の時間の指導に関する基本的な考え方

1 心に響く道徳の時間とは

これからの教育においては、「生きる力」の育成が不可欠である。そのために教育課程の基準の改

訂のねらいに「豊かな人間性や社会性、国際社会に生きる日本人としての自覚」の育成が上げられている。「豊かな人間性や社会性」とは、人間として、社会の一員として主体的に生きるための基本となる資質や能力であり、豊かな道徳性を意味する。

道徳の時間は学校生活全体で行われる道徳教育と関連を図りながら、道徳性を補充、深化、統合し、道徳的価値の自覚を深め、道徳的実践力を育成することを目標としている。つまり、各教科や特別活動、総合的な学習の時間等で学習した道徳的諸価値を、人間としての在り方や生き方という視点からとらえ直し、自分のものとして発展させる時間である。特に中学校では、人間としての生き方についての自覚を深め、主体的に道徳的実践力を身に付けていかなければならない。また、道徳の時間では、人間として生きていく上で、自分がかげがえのない存在として大切にされ、頼りにされていることを実感でき、自己存在感と自己実現の喜びを味わえる生き方ができる力、人間としてよりよく生きていく道徳的実践力が育成されなければならない。

では、道徳の時間がどのようなものになれば、人間としての生き方についての自覚を深め、主体的に道徳的実践力を身に付けていくことができるのだろうか。道徳の時間において、生徒は資料や話し合いをとおして、自分の生き方を考えたり、自分の考えと他の人の考えを突き合わせたりしている。それにより、自分自身と対話し、自分自身の価値観を確認したり、見直したりしている。つまりその過程において、あらためて自分の生き方を見つめ新たな考えが生み出され、生徒の心が揺れ動くことにより、道徳的価値をより深く自覚するのである。そこで、道徳的価値と自分自身の生き方との具体的なつながりを見いだし、学んだ価値観を自分の生き方に反映させようとする意欲や態度が育ったときに、道徳の時間が心に響くものになると考える。このことから、道徳の時間が、生徒の心を揺さぶり、人間としての生き方や在り方について深く考えさせ、生徒の感性に訴えかけるような「心に響く」ものであってこそ、目指す道徳性を育むことができる。

以上のことから、本研究では、「心に響く道徳の時間」を「道徳の時間の資料や話し合いをとおして、心が揺さぶられ、道徳的価値の自覚を深め、これからの生き方への指針を見いだすことのできる時間」ととらえることとする。

2 心に響く道徳の時間の指導の意義

中学生の時期における道徳性の発達には、大きな可能性を秘めており、その発達を促すことは極めて重要である。また、中学生の時期は、心の中で人間の生き方への関心が大きくなり、自分の人生をよりよく生きたいという願いが強くなっていくときでもある。特に価値観の多様化した現代に生きる生徒たちは、多様なことに関心を抱き、ものごとの受け止め方や考え方も千差万別である。そして、様々な葛藤や経験の中で、自己の心の揺れを感じながらも自分を見つめ、自分のよりよい生き方を模索しているのである。つまり、その大きく激しい心の揺れを経験しながら、自己を確立していき、他律から自律へと成長していくのが中学生の時期である。

以上のことから、道徳の時間は、道徳的価値が真に大切なものであるという自覚を深めさせ、自分が社会でどのように生きていくべきかを真剣に考えさせるものでなければならない。そして、生徒の感性に訴える「心に響く道徳の時間」の指導は意義があるものと考えられる。

本研究では、中学校の「心に響く道徳の時間」において育った生徒の姿を「自分の心に道徳的価値を受け止め、これからの生き方をつくりあげようとする思いをもつ生徒」ととらえることとする。そして、心に響く道徳の時間で育てる力と生徒の姿を次頁【表1】のように考え、研究を進めるものとする。

育てる力に示す「把握する力」とは、自己の体験や経験を基に、資料の道徳的価値をとらえようとする力である。「共感する力」とは、資料の主人公の心の動きに共感する力、話し合い、動作化や役割演技等の中で、友達の考え方を受け入れようとする力である。「発展させる力」とは、道徳の時間の話し合い、動作化や役割演技をとおして、自己の道徳的価値を再構成する力、道徳的価値を自覚し、自己の生き方に

反映させていく力である。この三つの育てる力は、「把握する力」と「共感する力」が基と

育てる力	生徒の姿
把握する力	自己の体験や経験を基に、道徳的価値をとらえようとしている
共感する力	資料や友達の考え方に共感し、道徳的価値をより深く自覚している
発展させる力	道徳的価値を再構成し、これからの自己の生き方を見いだしている

なり、「発展させる力」に結び付くと考える。

3 生徒の価値意識や生活の実態に応じた指導過程と指導法の工夫をすることの意義

生徒一人一人の価値意識というものは、生活経験に裏付けされたものである。そこで、道徳の時間においては、「今、生徒が何を問題にしているのか」「どんな悩みをもち、何を求めているのか」という心の状態を、様々な方法により把握し、指導のねらいを明確にしていくことが重要となる。そのことにより、道徳の時間が生徒にとってより身近なものとなり、生徒は資料に描かれた内容と自分自身とを重ね合わせ、自分自身の問題として考えることができる。

道徳の時間の指導過程とは、生徒がねらいの根底にある道徳的価値について内面的な自覚を深めていくための指導の手順を示すものである。すなわち、それは、生徒自らが望ましい人間としての生き方を追求し、道徳的価値についての見方や考え方を深めていく過程である。そこで、道徳の時間を心に響くものとしていくためには、生徒の実態をよく把握し、生徒の悩みや心の揺れ、学級や学校生活における葛藤などの課題を取り上げ、生徒の考えや意識の流れを大切にできるように、指導過程を工夫することが必要である。

また、生徒がより興味をもって授業に取り組み、ねらいとする道徳的価値を深めていくには、生徒の実態に応じて、指導法を工夫することが必要である。資料の提示の仕方、発問構成の工夫等、生徒の実態に応じ、いくつかの指導法を組み合わせながら指導過程を作成することが大切となる。

以上のことから、生徒の価値意識や生活の実態に応じた指導過程と指導法の工夫は、心に響く道徳の時間を展開する上で、意義あることと考える。

心に響く道徳の時間の指導に関する基本構想

生徒の価値意識や生活の実態に応じた指導過程と指導法の工夫をとおして、心に響く道徳の時間を展開するために、以下に述べる指導過程と指導法の工夫の内容と進め方を行うこととする。

1 生徒の価値意識や生活の実態の把握

生徒の価値意識や生活の実態を把握する手法として、心理診断的な各種検査、アンケート、観察、生活ノート、日記、班ノート、心のノート、諸活動の作文等がある。それらを手がかりとして、生徒の実態を事前に把握し、道徳の時間を展開することにより、課題意識を掘り起こし、自己の生き方を見つめさせることができると考えられる。

本研究では、日々変化する生徒の実態を把握しやすいという理由から、主に、生活アンケートや心のノートを使った実態把握を行い、道徳の時間の指導過程や指導法の工夫に生かしていくこととする。

2 生徒の価値意識や生活の実態に応じた指導過程の工夫の内容と進め方

(1) 生徒の価値意識や生活の実態に関する学級集団の類型化

生徒は、それぞれ固有の考え方、感じ方をもっている。道徳の時間は、その考え方、感じ方にさまざまな方法で刺激を与え、より望ましい姿を追求する時間である。その一人一人がもっている考え方や感じ方が「価値意識」と呼ばれるものである。また、生徒の実生活における行動様式は、一人一人の考え方が基になって現れるものである。

そこで、本研究では、生徒の「価値意識」を道徳の時間において指導する価値項目についての「道徳的価値に対する意識」とし、「生活の実態」をその価値項目に関する「実生活における行動様式」ととらえることとする。

生徒の価値意識や生活の実態は、一人一人異なり、多種多様なものである。しかし、道徳の時間は、学級の話合い等をとおして、他者の考えに触れ、一人一人の道徳的価値の自覚を深める時間である。したがって、生徒の価値意識や生活の実態が、学級としてどのような傾向にあるかをとらえ、指導に生かす必要がある。

その考え方に基づき、道徳の時間に指導するそれぞれの価値項目について、価値意識と生活の実態に焦点をあてると、学級集団は、「価値意識が育っていて、実生活における行動もともなっている集団」、「価値意識は育っているが、実生活における行動がともなっていない集団」、「価値意識は育っていないが、実生活における行動のみができる集団」、「価値意識も育っておらず、実生活における行動もできない【表2】学級集団の価値意識と生活の実態に関する四つのタイプ

学級集団のタイプ	価値意識	生活の実態
タイプ	育っている	実生活において、価値意識にそくした行動ができる
タイプ	育っている	実生活において、価値意識にそくした行動ができない
タイプ	育っていない	実生活において、価値意識とは関係なく行動のみができる
タイプ	育っていない	実生活において、価値意識にそくした行動もできない

意識と生活の実態に関する四つのタイプを【表2】のように考えた。

また、【表2】に示した学級集団の価値意識と生活の実態に関する四つのタイプには、【表3】に示す状況例があると考えられる。(本資料では、タイプ とタイプ は割愛する。)

【表3】学級集団の価値意識と生活の実態に関するタイプ とタイプ の状況例

タイプ の学級集団の状況例	タイプ の学級集団の状況例
価値意識が育っていて、道徳の時間に指導する価値項目についての話し合い等において、より望ましい考え方を述べ合うことができるような集団である。そして、どのような場合にどのように行動すればよいのか一通り理解し、学校生活においても前向きに頑張ろうとするような集団である。教師の期待通りの考え方や行動を行うことができるが、ときにその理解や行動が表面的なものだけとなってしまう、自分だけが(または自分たちだけが)よければよいという利己的な考え方に立つ場合も見られる。	指導する価値項目について、どのようなときにどのように考え行動すべきかということ、頭の中では理解できてはいても、実際の生活の場面ではその考え方が生かされていない集団である。中学生の場合は、道徳の時間での話し合いや発言等では望ましい考え方を述べるが、学校生活においては、なかなか行動がともなわない場合が数多く見られる。考え方は分かっているが、実際にどのように行動するか行動面の方法が分からないという場合がこのタイプの集団の特徴である。また、人間関係、特に生徒同士に働く仲間の圧力から、自分が思ったことを述べたり、行動したりすることができないという状況もみられる。

よって、生徒の価値意識や生活の実態に応じた「心に響く道徳の時間」とするためには、指導する価値項目において、学級集団のタイプを把握し、道徳的価値の自覚をどのように深めるかを意識したいくつかの指導過程を作成する必要がある。

(2) 生徒の価値意識や生活の実態に応じた豊かな表現活動を位置付けた指導過程

道徳の時間は、一人一人がもっている価値意識について、あらためてその意味を考えていく時間である。一人一人の価値意識を引き出し、よりよい方向へ高めていくためには、手だてが必要になる。自己の価値意識に、資料や他者の価値意識を介在させるために、「話し合い」や「動作化、役割演技」を、生徒が互いの価値意識を交流するための連結機能として位置付けることが必要である。

そこで、本研究では、「豊かな表現活動」として、「話し合い」や「動作化、役割演技」について取り上げ、指導過程に位置付けることとする。

道徳の時間での「話し合い」活動では、聞くことと話すことが並行して行われることにより、生徒が友達の考え方について理解を深めたり、自分の考え方を明確にすることができる。そして同時に、主体的に道徳的実践力を身に付けることができると考えられる。

「動作化、役割演技」は、生徒の感性を磨き、臨場感を高め、生徒をより主体的に学習に参加させることができる。「動作化、役割演技」により、生徒は、道徳の時間に自分自身の問題としてより深くかかわり、ねらいとする道徳的価値についての共感的な理解を深めることができると考えられる。

しかし、「話し合い」や「動作化、役割演技」をただ単に指導過程に位置付けるだけではいけない。

それらの活動を固定化したり形式化したりすることなく、形態を工夫したり、学級の実態や取り上げる資料の特質、他の教育活動との関連に応じて、より自己理解や他者理解が深まる工夫を心掛けていかなければならない。

以上の考え方から【表4】のように、「豊かな表現活動」を位置付けた基本的な指導過程を作成した。

【表4】「豊かな表現活動」を位置付けた基本的な指導過程

段 階	ね ら い	基本的な指導過程
自分の思いを見つける (導 入)	・ 主題に対する興味 関心を高め、ねら いとする道徳的価 値の自覚に向けて 動機付けをする	1 課題提示 2 自己理解(追求課題の把握)
自分の思いを深める (展 開)	・ 中心資料によって、 生徒一人一人がね らいとする道徳的 価値についての自 覚を深める	3 中心資料の提示 4 他者理解 } 豊かな表現活動 5 他者理解 } ・ 形態を変えた話し合いや動作 化、役割演技を行う ・ 豊かな表現活動を通じて自 己の考えと他の人の考えを 突き合わせる ・ もう一度考えを見つめ、道 徳的価値の自覚を深める
自分の思いをまとめる (終 末)	・ ねらいとする道徳 的価値の確認を図 り、今後の発展に つなぐ	6 自己発展 (道徳的価値の自覚を深め、自分なりに発展 させる)

3 生徒の価値意識や生活の実態に応じた指導法の工夫の内容と進め方

本研究の指導法の工夫については、価値意識や生活の実態に応じた豊かな表現活動を位置付けた指導過程の工夫と連結するものとして、以下の二つのことを重点に進めていく。

(1) 資料の選択や提示の仕方の工夫

生徒が主体的に自ら考える道徳の時間を目指すために、生徒の価値意識や生活の実態に応じて、「生徒の興味や関心、発達に応じた資料」「体験活動や日常生活等を振り返り道徳的価値の意義や大切さを考えることができる資料」を中心に選択することとする。

また、導入資料や中心資料を提示する際にも、資料をより効果的に生かすために指導過程のどの段階で提示を行うかを検討したり、興味関心をもたせるための資料提示の工夫を考えたい。

(2) 豊かな表現活動の工夫

「話し合い」については、生徒の実態に応じて、話し合いの形態の工夫が考えられる。また、生徒の実態によっては、話し合いに書く活動を加え考えをまとめさせることも必要である。

「動作化、役割演技」については、活動を取り入れる目的やねらいをしっかりとおさえ、予想される活動を見通すこと、どのような場面設定で「動作化、役割演技」を行わせるか等の工夫を図ることが必要である。

4 心に響く道德の時間の指導に関する基本構想図

これまで述べてきたことから、心に響く道德の時間の指導に関する基本構想図を【図1】のように作成した。

心に響く道德の時間の指導に関する手だての試案

- 1 生徒の価値意識と生活の実態に応じた指導過程と指導法を工夫した心に響く道德の時間の手だての試案作成のための視点

心に響く道德の時間の手だての試案を作成するにあたり、基本構想をふまえ、手だての試案作成の視点について右のように考えた。

2 手だての試案作成のための視点に基づいた具体的な手順と内容

(1) 生徒の価値意識や生活の実態についての把握の手だてと指導のねらいの明確化

右の手順により、学級集団が基本構想で示した四つのタイプのどのタイプに近い把握し、指導過程を構想し、指導のねらいを明確化していく。しかし、学級集団の集団としての傾向が明確でない場合は、指導のねらいにより、学級の中のどのタイプの集団に重点を置くかを決め、指導過程を決定する。

指導する価値項目についての生活アンケートの実施
価値項目に関連する心のノートの記述内容の分析
体験活動や諸行事の生徒の作文や日常行動の観察
学級集団のタイプの傾向の把握
道德の時間の指導のねらいの明確化

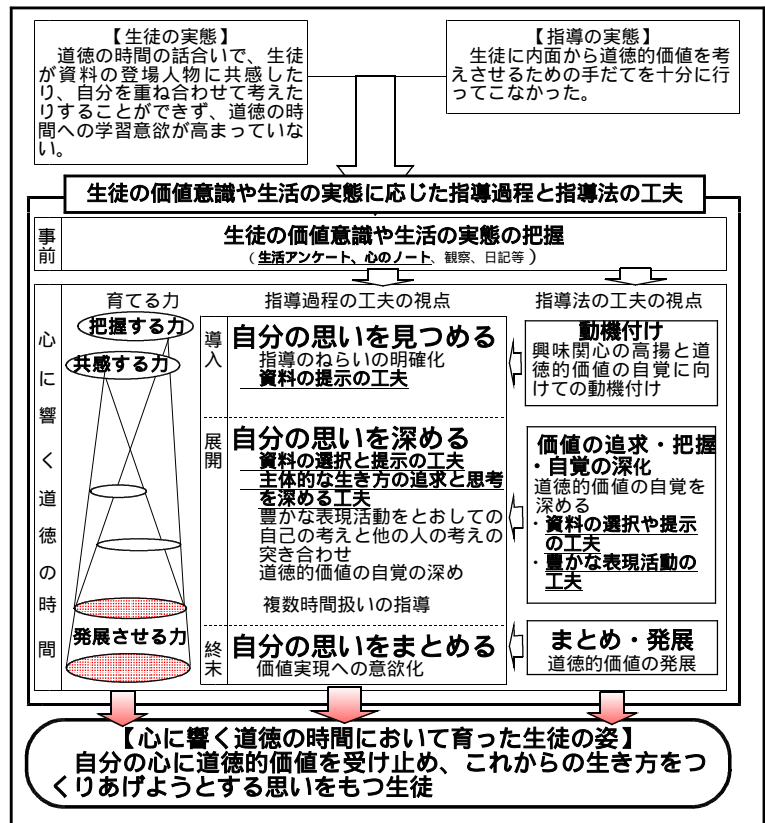
しかし、学級集団の集団としての傾向が明確でない場合は、指導のねらいにより、学級の中のどのタイプの集団に重点を置くかを決め、指導過程を決定する。

(2) 学級集団のタイプに応じた道德的価値の自覚を深める過程を意識した指導過程

ア 豊かな表現活動を位置付けた基本的な指導過程の段階において留意すること

基本構想で述べた、豊かな表現活動を位置付けた基本的な指導過程の「自分の思いを見つめる段階」「自分の思いを深める段階」「自分の思いをまとめる段階」において、56頁【表2】の価値意識や生活の実態における学級集団のタイプに応じて、右の四点について留意していく。

「自分の思いを見つめる段階」では、追求課題を把握し、自己の道德的価値を確認する場面を設定する。
「自分の思いを深める段階」では、学級集団の実態に応じて、どのような豊かな表現活動を位置付けるかを構想する。
「自分の思いを深める段階」に位置付ける豊かな表現活動では、生徒が思考、判断、感情等を自由に表現できるように形態を工夫する。
「自分の思いをまとめる段階」では、道德的価値の実現への意欲化が図られる方法を取り入れる。



【図1】 心に響く道德の時間の指導に関する基本構想図

イ 学級集団のタイプに応じた豊かな表現活動を位置付けた指導過程の構想

基本構想で示した学級集団の四つのタイプに応じて、指導過程の在り方を次のように考えた。(本資料では、タイプ とタイプ に応じた指導過程は割愛する。)

(ア)タイプ の学級集団に応じた指導過程の構想(タイプ : 価値意識が育っていて、行動もともなっている)

タイプ の学級集団では、自分たちが認識していたり、表面的にとらえていたりしている道徳的価値を、より高い段階のものに引き上げていくことが必要である。また、道徳的実践力が道徳的実践へつながるようなねらいを重点に置きたい。
タイプ の学級集団に応じた指導過程では、次の流れの指導過程を構想する。

指導する価値項目について自分たちの日常生活から追求課題を提示する。
自己の考えを確認した上で、追求課題について話し合いを行う。
話し合いの後、中心資料を提示し、資料と自分たちの価値観をかかわらせていく。
より深い道徳的価値の自覚と道徳的実践力を身に付けるため、資料を使つての話し合いを行う。

次に、タイプ の学級集団に応じて作成した指導過程を【表5】に示す。

【表5】タイプ の学級集団に応じた指導過程

段 階	学 習 活 動	指導上の留意点
自分の思いを見つめる	1 導入資料からの課題提示 2 自己理解 3 他者理解	生活アンケート等身近な問題を提示するカードにより、自分の価値観を示す ペアや小集団で話合う
自分の思いを深める	4 中心資料の提示 5 他者理解	適切な中心資料を提示する 発問の吟味と構成を工夫する 他者理解 と形態やメンバーを変えて話合う
自分の思いをまとめる	6 自己発展	今後の生き方に生かすためのまとめを行う

「注」ゴシック体は指導過程の重点を示す。

(イ)タイプ の学級集団に応じた指導過程の構想(タイプ : 価値意識は育っているが、行動がともなっていない)

タイプ の学級集団では、理解している道徳的価値を、実際に生活の中でどのように生かしていけばよいかということを考えさせる必要がある。また、自己の考え方を自由に表現できるような活動を組み込み、より広い考え方をもてるようなねらいを重点に置きたい。
タイプ の学級集団に応じた指導過程では、次の流れの指導過程を構想する。

中心資料への興味関心を高める導入を行う。
中心資料の提示の後に、追求課題を提示する。
自己の考えを確認した上で、道徳的価値の自覚を道徳的実践力に結び付けるために、動作化や役割演技を行う。
動作化、役割演技の後に、道徳的価値の自覚を深めるための話し合いを形態を変えて行う。

次に、タイプ の学級集団に応じて作成した指導過程を【表6】に示す。

【表6】タイプ の学級集団に応じた指導過程

段 階	学 習 活 動	指導上の留意点
自分の思いを見つめる	1 導入資料の提示 2 中心資料の提示 3 課題提示 4 自己理解	興味関心を高める導入をする 資料提示の工夫を行う カードにより、自分の価値観を示す
自分の思いを深める	5 他者理解 6 他者理解	小集団による動作化や役割演技を行う 他者理解 を受けて話合う
自分の思いをまとめる	7 自己発展	今後の自己の生き方に生かすためのまとめを行う

「注」ゴシック体は指導過程の重点を示す。

ウ 道徳的価値の実現の意欲化へ発展させる手だてについて

「自分の思いをまとめる段階」において、今後の自分の生き方に生かすためのまとめの活動を右のように行う。

他者理解の活動を通じて、あらためて自分の考え方をまとめる書く活動を行う。教師の説話や補助資料等を用い、学んだ価値を印象付ける。

いくつかの方法から、自己の道徳的価値の自覚を深め、自分なりに発展させる場面を設定し、心に響く道徳の時間のまとめとしていく。

(3) 生徒の価値意識や生活の実態に応じた資料の選択や提示の仕方の工夫の手だて

心に響く道徳の時間を展開していくために、生徒の価値意識や生活の実態に応じた資料を選択し、生徒が資料の状況を十分に理解できるように、資料の選択や提示について右のような具体的な手だてを考えた。

生徒が資料と自分を重ね合わせて考えたり、資料を共感的に理解できるようにしたりするために生徒の実態からかけはならないような中心資料を選択する。生徒の生活に関係した悩みや課題に対応した中心資料を選択をする。体験活動や日常生活を生かした導入資料を提示する。挿絵や視聴覚機器を有効に活用し、興味関心をもたせながら資料の状況を理解させるようにする。生徒の実態と資料の内容に応じて、資料の部分的な提示等の工夫を行う。

なお、中心資料は、基本的に副読本や文部省の道徳教育推進指導資料から選択することとする。

(4) 豊かな表現活動を取り入れた指導の具体的な手だて

ア 自己理解の場面における具体的な手だて

指導過程の「自分の思いをまとめる段階」において、追求課題を把握し、自己の道徳的価値を確認する場面を設定する。その際に右のような手順で自己理解を行っていく。

導入資料や中心資料から追求課題を設定する。追求課題提示の後、課題に対して自分がどのような考えをもつのか、また、資料の登場人物の考えや行動に対してどのような考えをもつのか、自己の考えをまとめる。自己の考えをカードを使って表現する。自己の考えをカードで表現する際は、自己の考えの判断の理由を明確にする。

イ 他者理解の場面における具体的な手だて

自分の考えをまとめた上で、指導過程の「自分の思いを深める段階」において、57頁【表4】の豊かな表現活動を位置付けた基本的な指導過程に基づき、「話し合い」「動作化、役割演技」を取り入れた他者理解の場面を設定する。他者理解では、他者の考えと自分の考えを比較することにより、生徒に多様な考えの存在に気付かせ、そして他者理解では、更に自己の考えを深めるといふねらいをもって行うこととする。その際に、右の手順で他者理解と他者理解の活動を行っていく。

自己理解の後、同じ考え（場合によっては違う考え方）の生徒同士で、他者理解の活動のペアや小集団を編成する。ペアや小集団で他者理解の活動として、学級集団のタイプに応じて、話し合いまたは動作化や役割演技を行う。他者理解の活動を受けて、他者理解の活動として、小集団や学級集団による話し合いを行い、自己の道徳的価値の自覚を深め、自己発展へとつなげる。

また、他者理解を行う際には、右のようなことを生徒に留意させて取り組ませる。

ペアや小集団の活動では、自分の意見をはっきりともち述べる。しっかりと最後まで他者の意見を聞く姿勢をもつこと。疑問点や反論すべき点等は必ず聞き返すこと。

ウ 豊かな表現活動を取り入れる際の留意点について

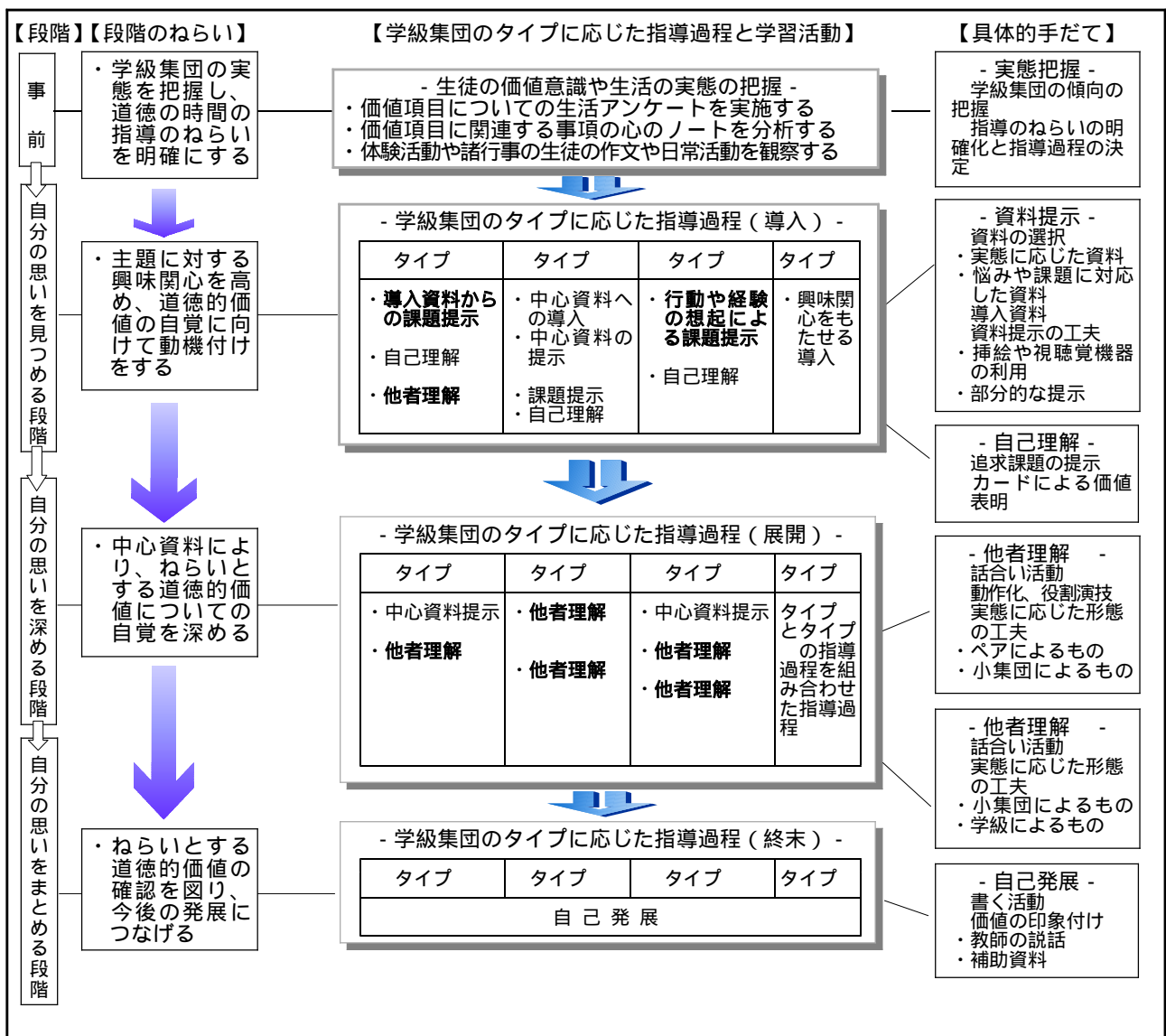
豊かな表現活動を位置付けた道徳の時間の指導を展開していくためには、指導において次のことに留意していかなければならない。

生徒が意欲的に取り組めるように、日常の学級経営の中で心掛けておくべきことと、教師は、指導者の在り方をしっかりと意識して、より豊かな表現活動を取り組むことができるようにしていくことが大切である。

形態を工夫した話し合いができるように、他の活動の中で取り組ませる。
 日常の指導の中で、表現活動に慣れさせることや自由に表現できる学級の雰囲気をつくる。
 生徒の反応を入念に予測し、見通しをもった発問の構成を行う。
 教師はコーディネーター的役割を行い、生徒の思考の流れが途切れないようにし、主体的な活動を促す。
 教師は、生徒の反応や発言を全面的に受け止める姿勢で指導を行う。

3 心に響く道徳の時間の指導に関する手だての試案

これまで述べてきたことを基に、生徒の価値意識や生活の実態に応じた指導過程と指導法を工夫した心に響く道徳の時間の手だての試案を【図2】のように作成した。



【図2】 生徒の価値意識や生活の実態に応じた指導過程と指導法を工夫した心に響く道徳の時間の手だての試案

研究のまとめ

1 研究の成果

(1) 心に響く道德の時間の指導に関する基本的な考え方について

心に響く道德の時間を展開するためには、道德の時間を資料や話し合いをとおして、心が揺さぶられ、道德的価値の自覚を深め、これからの生き方への指針を見いだすことができるものにし、よりよく生きる力を育むことが必要であるという基本的な考え方をもつことができた。

また、よりよく生きる力を育むためには、道德の時間において、「把握する力」「共感する力」「発展させる力」の三つの力を育成すればよいのではないかという見通しをつけることができた。

そして、その三つの力を育成するために、生徒の価値意識や生活の実態に応じた指導過程と指導法を工夫した心に響く道德の時間が展開する必要があるという考え方を確認することができた。

(2) 心に響く道德の時間の指導に関する基本構想について

生徒の価値意識や生活の実態を把握し、その傾向から学級集団を具体的に四つのタイプに類型化するという考え方をもつことができた。また、そのタイプに応じた指導過程を作成し、その指導過程に基づいた指導を行えば、生徒の心に響く道德の時間が展開できるという基本構想を立案することができた。また、その際、指導過程に豊かな表現活動を位置付けることで三つの力を育成できるのではないかという見通しをもつことができた。

(3) 心に響く道德の時間の指導に関する手だての試案について

心に響く道德の時間の指導を展開する手だてとして、生徒の価値意識と生活実態に応じた豊かな表現活動を位置付けた指導過程を作成することができた。また、資料の選択や提示の工夫を検討し、話し合いや動作化、役割演技という豊かな表現活動を取り入れる際の具体的な手だてを検討することができた。

その結果、生徒の価値意識や生活の実態に応じた指導過程と指導法を工夫した心に響く道德の時間の手だての試案を作成することができた。

2 今後の課題

本年度の研究をふまえ、手だての試案に基づく指導実践をとおして、中学校の心に響く道德の時間の指導に関して、実践的に究明することが2年次目の研究内容でもあり、今後の課題でもある。さらに、具体的な手だてに検討を加え、生徒の価値意識や生活の実態に応じた指導過程と指導法の工夫をとおした心に響く道德の時間の実践を展開していきたいと考える。

【参考文献】

- 諸富祥彦,「道德授業の革新 - 「価値の明確化」で生きる力を育てる」, 明治図書, 1997
- 荒木紀幸,「続 道德教育はこうすればおもしろい - コールバーグ理論の発展とモラルジレンマ授業 - 」, 北大路書房, 1997
- 七条正典・五条しおり 編著,「中学生の心の教育」, 日本図書センター, 1999
- 全国道德授業実践研究会,「生徒の心に響く道德授業の進め方」, 東洋館出版社, 1999
- 岩手県道德教育研究会,「Q & A 道德教育」, 岩手県道德教育研究会, 2000
- 石井知予子,「中学校における心に響く道德の時間の展開」, 京都市立永松記念教育センター, 2001